

汲古書院刊

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詞華集日本漢詩

第十卷

詞華集 日本漢詩 第十卷(第II期第一回配本)

昭和五十九年五月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川 英郎

松 下 忠

佐 野 正 巳

解題 佐 野 正 巳

発行者 坂 本 健 彦

印刷 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二一五―四

電話(六五)九七六四 振替東京五二五〇三三

©一九八四

目次

解題	3
本文(影印)	
護園録稿	1
金蘭詩集	39
楽泮集	85
麗沢詩集	219
嚮風草	275
文化嚮風草	277
嚮風草二編	319
盛音集	391
南紀風雅集	413
声応集	505
十九友詩	539
如蘭集	561
従吾所好	580

解題

佐野正巳

本巻には享保十二年（一七二七）に刊行された「護園録稿」以下、「従吾所好」（嘉永三年刊）に至るまでの十一種の詞華集が収められている。学派、諸藩、友詩、諸名公詩、風雅の趣向などなどの総集である。以下、諸書を解説することにする。

護園録稿

記録者

享保以後、学統を同じくする人々の仲間意識に支えられた所謂、一門の総集が出現するが徂徠一門の詩を選んだものがこの「護園録稿」である。宝暦以後は、学統を超えた交遊が文業と儒業の分離を形成したが、「護園録稿」では、平野金華が序文で「吾党言詩者」といつているところからすればグループ内の仲間意識が強い。また「先生因友人之乞選其塾生于子迪之所録社中諸君之詩若干首其息大寧校之」とあれば本書は徂徠が選したものを門人の宇佐美瀧水が記録したものである。そしてそれを徂徠の養子荻生金谷が校定した。

宇佐美瀧水、名は恵、字は子迪、通称恵助、瀧水はその号である。号は郡名によっている（「雲室隨筆」）。上総国夷隅郡岬町の産である。宝永七年（一七一〇）正月、宇佐美習翁の二男として生れ、享保五年、十一歳のとき句読を同県の利倉寿仙に受け、十七歳の時父習翁のすすめにより護園に入門、塾に在ること三年にして徂徠の死に会う。享保十三年

瀧水十九歳のときであった。この年、「七経孟子考文補遺」の助校を行なって県官より古金七両を賜わっている。同十九年、二十五歳のとき護園社を辞し板倉美仲を伴って上総に帰っている。そして自邸内に一室を築き陽谷亭ようこくと称し、書斎兼私塾となし延享元年（一七四四）二月までの十年間、子弟の教育に専念した。この間、「詩書小序」（元文三年）を完成、元文六年に刊行している。延享元年、再び江戸に出、麹町に僑居、その後芝三島街に移り私塾を開き、塾生に教授している。寛延元年（一七四八）、瀧水は松江藩の認めるところにより任用されるところとなる。有名な天愚孔平の父萩野春庵（復堂）の推挙によるものであった。駒込泰宗寺の萩野復堂の墓碑銘は瀧水の手になる。宝暦八年（一七五八）藩世子（松平不昧公）の侍講となる。宝暦十二年藩世子の補導の益をはかるため、中国歴代の名臣の事績を収録し「補儲編」という書を撰定し心をくだしている。そして藩主宗衍の援助によって明和三年刊行された。明和五年には、治郷の弟、雪川公の句読師をも命ぜられている。以来、安永五年（一七七六）八月十日に死去するまで、松江藩江戸詰文学所教授の任にあった。

刊行された著書としては右のほか、「絶句解拾遺考証」（四卷三冊、明和七年刊）没後は「古文矩考文変考」（一卷一冊、天明三年刊）、「弁道考注」（二卷一冊、寛政十二年刊）また編著としては、生存中には本書「護園録稿」のほか、「徂徠先生素問評」（一卷一冊、明和三年刊）。没後「服膺孝語」（一卷一冊、天明四年刊）が刊行された。瀧水の著作といっても、そのほとんどは、師徂徠の学問書の主要著作の考証書であって、真に瀧水の創意によるものは、極めて少ないといっている。また師徂徠の未刊の著書を版に上せ、世に裨益するところが多かった。列举してみると、「孫子国字解」（寛延三年刊）、「四家雋」（六卷六冊、宝暦十一年刊）、「南留別志」（五卷五冊、宝暦十二年刊）、「古文矩」（二卷一冊、明和元年刊）、「読荀子」（四卷四冊、明和二年刊）、「素書国字解」（二卷二冊、明和六年刊）などがあげられる。右のうち、「四家雋」と「古文矩」とは、藩主宗衍の後援と資金援助によるものである。瀧水の考証学者としての価値は高い。

本書が刊行されるまでには、いろいろ紆余曲折があったらしい。それは、服部南郭と太宰春台との間で、徂徠の選とすることが賛否両論に分れたのである。内閣文庫で披見した「南郭往来」（写本）には春台が、「護園録稿」所収の詩に疎謬がかなりあることを指摘、徂徠没後のこととて非難の口実を与えぬよう徂徠の選とすることをやめたらどうかと提案していることが書かれている。しかし結局は南郭は当初のプランどおり押し切った。両者が衝突したのはいうまでもないことである。以下は春台の書牘である。

拙者申候は俗人は畏るゝに不足候只世間の人皆無眼子にても有ましく候千百人も有識具眼の人_レ有_レて録藁を見候は、徂徠の門下にては唐詩の法律を破候と可申候此事歎かしく候故徂徠の選と申事を消し申度と存_レ迄に候足下の御書面にては徂徠の選に究り来翁只今在世にても録中の疎謬は構ひ申ましきとの事足下の御請合なれば慥に御座候是にて何もかも埒明申候拙者は前に申候通徂徠の仇敵海内に充満し候間先師の為に侮を禦候愚忠にて申出候縁の下の力持とやらん何の益もなき事に御座候間必止め可申候

ところで、「護園録稿」刊行のいきさつについては、平野金華の「護園録稿序」（享保十二年撰）に、

問者先生_ヲ因_ニ友人_ノ之_ヲ乞_フ一選_ス其塾生于子迪_カ之所_ノ録_{スル}杜中諸君之詩若干首_ヲ其息大寧校_シ之_ヲ将_ニ付_ン梓人_ニ余不佞乃以_ニ其徴_ヲ一序

とあるによれば、徂徠生存中に瀟水が杜中諸君の詩若干首をノートしておいたものを徂徠の養子荻生金谷（名道済、字大寧。金谷と号す。郡山藩儒）が校定し上梓せんとしたことが知られる。卷首につきのように記されている。

瀟水子 恵子迪録

金谷物道済太寧校

本書の初版は享保十二年であるが、所蔵者の主なところは京大・米沢となっている。しかし底本としては、享保十六

年版を使用することにし、内閣文庫、国会鸚鵡軒文庫を披見したが、鸚鵡軒文庫本を使用させていただいた。

内 容

古文辞派の人々の作品は、各人の別集をみうるほかは、総集としてはこの徂徠一門の詩を収めた「護園録稿」と、明和、安永の詩を集めた「大東詩集」がある。（本集では当初「大東詩集」も収める予定であったが紙幅の関係もあって割愛した。）「護園録稿」に詩作品が載った享保期の人々の場合、唐詩にどれだけ似るかに作品の価値の基準を置いていた。そして盛唐の高雅雄渾の詩風を慕っていた。したがって盛唐詩の古語に依拠しすぎるあまり詩情に乏しく精緻な観察や内省がないようである。

「護園録稿」に詩を採録された護園の人々の名を列举してみると、本書は体別詩集にはなっていない、上巻（二十六丁）には、

守屋峨眉（四首）、高野蘭亭（一六首）、本多猗蘭（七首）、三浦竹溪（二首）、釈慧巖（四首）、太宰春台（七首）、鷹見爽鳩（二六首）、田中蘭陵（二首）、宇野士朗（七首）、秋元淡園（六首）、木下蘭皐（二首）、服部南郭（三三首）、吉田孤山（二首）、和智東郊（七首）、原叔茂（六首）、邨公亮（二首）、山根華楊（二〇首）、小田村酈山（四首）の一八名、一四七首。

続いて下巻（三十三丁）には、松子錦（一〇首）、平野金華（二九首）、源頼寛（二首）、安藤東野（一二首）、滕順得（一首）、板倉復軒（二首）、板倉美仲（七首）、板倉龍洲（三三首）、釈了玄（二三首）、伊藤南昌（四首）、土屋藍洲（四首）、久津見華岳（五首）、成島錦江（八首）、釈太黙（三首）、入江南溟（五首）、木村梅軒（二首）、住江滄浪（七首）、佐元錫（四首）、山井崑崙（一首）、武文安（二首）、釈元海（三首）、釈義全（三首）、越智雲夢（五首）、山県周南（二八首）、朝比奈伯起（二首）、小倉鹿門（六首）、津田東陽（六首）、滝鶴台（六首）、根本武夷（四首）、石川大凡（四首）、山田麟嶼（二首）の三一名、一九三首を収めている。

以上、計四十九名の護園の人々の詩作品の一大アンソロジーであって護園社中の詩が作者を以て類聚してある。この「護園録稿」の面々と「護園雜話」（「続日本随筆大成」4所収）の巻末の「護園門下人名」とはほぼ一致し、「護園門下人

名の末尾には、「右四十有余人記高弟大凡」と記されている。「護園雜話」の著者は荻生金谷かも知れぬのである。

金蘭詩集

編者

竜 草廬、名は公美のち元亮。字は君玉のち子明。通称彦二郎また衛門。草廬・松菊主人・竹隱などと号した。京伏水（伏見）の人で、「近世叢語」の説によれば正徳五年（一七一四）の生れとなる。享保十一年（一七二六）、十一歳のとき父を喪い、家産が尽き母子相抱いて泣いた。十四歳のとき読書を好み孜々として息まず、古文辞の学を好み文学で家を起こそうとした。遂に元文四年（一七三九）二十五歳のとき京都に惟を下して教授した。京都烏丸小路といわれる。寛延元年（一七四八）、三十四歳のころ、菅氏小蘭を娶ったらしい。同二年長女阿蘭が生れている。

公美は才思秀麗、詩を善くしまた書を能くし、さらに国学にも精通していたので従学するものが多かった。

寛延三年（一七五〇）、三十六歳のとき、彦根藩主井伊直定侯に仕え、優遇を受け、なお平安に在住した。頼春水の「東遊雜記」によれば住居は「海老江、愛知川近所之由」といわれる。毎月十六の講演日には郷士から藩士まで列席する者、六百人を数えた。宝暦元年（一七五一）、三十七歳、長男秀松（世華）が生れる。

その後、宝暦四年（一七五四）この「金蘭詩集」が刊行をみているので、このころすでに、公美は芥川丹邱（たにけい）、清田僮叟、木村蓬萊、林東溟、日下生駒らと詩社を結び、幽蘭社といっていた。公美の詩は、「近世叢語」に、「其論詩曰、李杜二王之外、独岑嘉州予所特愛也、明則初有劉青田、後有嘉靖七子、七子之中、謝茂秦為魁、李于麟次之」とあるように古文辞の系統をひいているが、唐では岑嘉州を特に好むといい、明の七才子では謝茂秦をとくにあげるなど、草廬には奇をてらう傾向があつた。そのためか竜草廬を盟主とする幽蘭社の評判は「青衿白面、門下に寓す

と雖も、學術を以て心に懸ず、自ら無狀無頼の人となる。當時志ある者、之を指笑して遊乱社という。」「先哲叢談」後篇）と京儒たちに非常に評判が悪い。事実、派手な遊び人の徒党の觀があつたといわれる。

宝曆八年（一七五八）、四十四歳のとき、二十年間住みなれた京都より草廬は彦根城中の第宅に移居している。中村幸彦氏は、この彦根藩召聘移居を以て幽蘭社の解散の時期とみなしておられる。またこのころ賀茂真淵に入門している。門人帳に「彦根家中 龍元二郎」とある。安永三年（一七七四）、六十一歳の冬彦根藩を致仕している。寛政四年（一七九三）二月二日、七十八歳で卒し、黒谷に葬られた。

諸本

本書が、「初集」のみで終つたのは惜しいが、本書はまた宝曆四年七月元板が焼失し、寛政七年正月に補刻本がでている。宝曆四年版を所蔵している機関は、国会鸚軒、慶大で両方披見している。底本としては、家藏本を使用した。

内容

まず書名の由来だが、「凡例」に「是編以_ニ金蘭_ニ名義取_ニ之周易之辭_ニ也」とあれば、「二人同心、其利斷金、同心之言、其臭如_レ蘭。」とあるごとく交友詩集の意味である。したがって、幽蘭社の交友それに門下諸子の作品を詩体別に集めている。卷之一（五言古詩、一〇首）、卷之二（七言古詩、一三首）、卷之三（五言律詩、六一首）、卷之四（五言排律、四首）の順に前冊に収め、後冊には卷之五（七言律詩、六一首）、卷之六（五言絶句、三八首）、卷之七（七言絶句、一二〇首）を収めている。作者六七人、三〇七首を数えることができる。六七人の出自地域は二十二カ国におよび交友圏の広さを物語っている。人脈の勢力圏の地域としては、平安（一六人）、越前（一〇人）、江州（八人）、山城（四人）、丹州（三人）などが主なところである。

さらに収録詩数が多い人を掲げると次の八人である。（十首以上を掲げる）

孔文雄（日下生駒）	河内	一四首
鳥宗成（鳥山崧岳）	大坂	一四首
田 玠（福田九鳥）	京都	二六首
河周辰（河窪東汀）	江州	一五首
堤佑之（堤 金溪）		一三首
柳 宏（黒柳万年）		一六首
幡君英（小幡蘭州）	京都	一九首
室 襲（山室春窓）	越前	二九首

また著名な作者には、河内の孔文雄、彦根藩儒で伊藤東涯門の沢村琴所、同じく東涯門の鳥山崧岳、太宰春台門の五味釜川、尾張藩の千諸成、相国寺の僧の大典など古文辞学または古義学の学派の流れをくむ人が多いのが特色である。交友の魅力が次第に文人の気持ちをとらえるに至った事情が本書によって明白に読みとれるのである。また本書には、世にいういわゆる「幽蘭社十才子」——香川蓬窓・大江玄圃・岡崎廬門・小幡蘭州・西川滄海・山室春窓・佐々木魯庵・荒翠山・川合春川・釈豹隠——の詩も含まれている。だが、本書は初編で終ったらしく続編はなく、十才子の大江玄圃の「友詩」姉妹編たる「玉振集」に、また同じ十才子の岡崎廬門の「麗沢詩集」にそれぞれ別途に継承されたのである。

楽洋集

編者

藪孤山、名は愨、字は士厚、孤山又は朝陽山人と号した。通称茂二郎。享保二十年（一七三五）、熊本藩文学藪慎庵の

二男として生れる。幼時より父につき経史を講究、そして宝暦七年（一七五七）二十三歳、藩主に認められ学資を支給され江戸に遊学、翌八年には京都に遊学、西依成斎・河野恕齋（じよさう）らと交友を結んだ。（河野恕齋・藪孤山・赤松蘭室の三人を「海内三才子」と呼ぶ）いること三年、帰藩して藩校時習館訓導に命ぜられ助教（宝暦十三年）となった。明和五年（一七六八）、時習館二代教授に昇進し爾来、寛政二年（一七九〇）中風悪化のため致仕するまでの約二十年間、藩学を督したのである。享和二年（一八〇二）四月二日六十八歳で没した。死後、文化十三年（一八一六）に、時習館蔵版として「孤山遺稿」（十六卷・十二冊）が門人で家老の島田貞孚（撫松）の序を付して刊行されたのである。

広瀬淡窓の儒林評に「亀南溟ニハ十オホドモ長ゼシ人ナルベシ。南溟之ニ兄トシ事フト云ヘリ。当時藪、亀井ヲ以テ海西ノ両名家トスルコト、児女マデモ知レリ。大川滄洲（赤松）が栗山ニ与フル書ニ、朱子派ニテ文辞アルモノハ、足下ト藪子厚ト二人ナリト云ヘリ…」と孤山を評し評判が高かった。

諸本

「国書総目録」には、一〇卷一〇冊、安永七年刊として所蔵者の名をあげている。国会・国会鸚軒・内閣・静嘉・日比谷加賀となっている。国会のほかは、すべて披見したが、十冊本は加賀文庫本、五冊本は内閣文庫本と静嘉堂文庫本・鸚軒本は三冊本となっている。本集では、底本として鸚軒文庫本を使用させていただいた。安永七年以降、本書が再版された形跡は見あたらない。この肥後藩の詩集たる「楽洋集」の出版周旋方には、頼春水の力にあずかるところが多かった。頼桃三郎氏の「詩人の手紙」（文化評論出版）には、藩儒藪孤山が頼春水に宛てた礼状につきのごとくでている。

〔二簡奉呈、述ば秋冷之節候得共、愈可為御寧一珍重奉存候、小子無異罷在候、頃日は預華簡忝薰誦、且楽洋集段々厚く御周旋被下旨、追々萱野父子より申来忝、依之宜敷出来、此節数部指下し披覧仕候、偏以御世話之主と

不浅忝奉存候、執政共へも申聞候所、同前忝存候、依之家老堀平太左衛門より以手帖御謝辞申進候、尚又僕より
宜敷得貴意候様申聞候、将又右楽泮集^{タテ}部并国織之紗綾二卷右上梓之自祝致遣呈之候、誠以表寸忱迄に候、御叱留
奉希候、此等得貴意度如是御座候、尚後音可申述候、恐々謹言

八月廿七日

藪 慤 頓首

頼千秋道盟 梧下

尚々三原詩奉承知、取揃後便可奉呈候

以上

藪孤山は頼春水より十一歳の年長であつたがすでに春水の在阪時代から交渉があつたのである。「八月廿七日」の日付
は出版の翌年つまり安永八年と推定できる。頼春水の「掌録十」(文化九年)にも「○細川家ニ楽泮集トテ重賢公首トシ
テ一藩ノ詩集アリ。細川ノ学校ハ宝暦五年乙亥ナリ。^{玉山ノ記アリ} 楽泮集ノ成リシハ安永二年癸巳ニテ、開学ヨリ十九年目
也。」(「隨筆百花苑」第四卷)とあり、楽泮集序は安永六年丁酉二月、孤山によつて書かれているが、これによると、そ
れより四年前にすでにまとまっていたようである。

内 容

熊本藩の君民合体の詩文集ともいふべきもので、時習館教授藪孤山が六代細川重賢^{かた}の治世に肥後国一国における当
代の諸人の漢詩を集めたものである。「附言」に、「先世之詩既別録成^レ卷。故此編限以^ニ今公之世。」とあるによつて明
白である。春水の「在津紀事」下にも「楽泮集十卷、輯^下肥後侯及支封侯諸士以至^ニ庶人^一之詩^上也」とある。

楽泮集の名は、孤山の序に「名曰楽泮集取^{マツ}諸魯頌思^{マツ}楽泮水之義也」とあるとおり、「詩・魯頌・泮水」思^{マツ}楽泮水、
薄采^ニ其芹^一に典拠があり諸侯の学宮をいった。つまりここでは藩学時習館を指すのである。「附言」中に、「此編名楽

泮而偏及_二野人僧道之作者以下_一国風化実由_二泮宮始_上也」といい、藩学時習館の教学が一藩士民に及んだことを述べ、その盛事を称讃している。巻首に細川重賢の詩を掲げ漸次一般士人らに及んでいる。その作者二〇九人を数えることができる。巻末には付録として、編者藪孤山の詩二六首を付している。いまその内容構成を簡潔に紹介しておく。便宜上、表示することにする。

詩数		主なる作者(五首以上)	
巻之一	三二		
公閣名詩	一八	藩主たちの詩を収める。	
宇土侯立札	六		
孝応(宇土侯弟)	六		
巻之二	八七	国老、参政、府学祭酒の詩を収める。	
有吉立喜(国老)	九		
堀君綽(国老)	六		
米田子隠(参政)	四二		
秋山玉山(府学祭酒)	四四		
巻之三	一〇五	主として番頭・奉行・副奉行・府学助教・訓導・侍読らの詩を収める。	
堀大簡(番頭)	六		
井口君祥(奉行)	一一		
大里惟公(副奉行)	九		
草野潜溪(府学助教)	七		
池辺蘭陵(府学訓導)	三八		
吉田彦(翁主・腰臣)	五		

卷之六	卷之五	卷之四
九〇	一〇五	一二九
伊形大素(師員) 三五 木庭宇吉郎(世子侍臣) 六 和久田子修(遊倅) 七 村井子瑤(府学句読師)二〇	有馬彦章(世子侍読) 一七 大城文卿(府学訓導) 一九 西岡子彬(府学句読師)一四 中山田穆甫(府学句読師)六 巖下君恭(府学句読師) 八 辛島伯曄(遊倅) 一四 和田子成(遊倅) 一六	片岡朱陵(侍読) 三四 辛島青溪(府学訓導) 一七 巖下大雅(府学訓導) 一三 高本紫溟(府学訓導) 一九 能美仲瑞(番士) 一〇 秋山子順(番士) 一〇 津田子弼(番士) 一〇
十三人の遊倅の詩と師員・世子侍臣・府学句読師の詩を収める。	ここでは世子侍読・府学訓導のほか府学句読師・遊倅の人の詩を収める。	侍読・府学訓導のほか番士の詩を収める。

卷之七	卷之八	
一〇六	一〇五	
山田怡雲(処士) 一四 山田子華(中扈從) 九 富田元朗(隱医) 一九 飯田士良(佑筆) 八 佐久間子坤(宇土侯臣) 一八 下津公夏(長岡當之臣) 五 志水子国(長岡當之臣) 六	西垣莊大夫(長岡當之臣) 一七 藤木士竜(長岡當之臣) 七 三宅士図(長岡當之臣) 五 仲井士成(長岡當之臣) 一二 志水子邦(長岡當之臣) 九 板井徵卿 一一 左右田元幹(処士) 一一 伊淳(庶人) 一〇	南李菴(官医) 五 鳥居元素(官医) 七
処士・中扈從・隱医・佑筆、さらに宇土侯臣・国老・長岡當之臣下の詩を収める。		主として十四人の国老・長岡當之臣下の詩を収める。
ここは、藩医および町医の詩を主として収める。		

卷之九	一一六	村井忠山(医) 二五 田中礼夫(医) 一一 小篠子孝(医) 一〇 吉永元祥(医) 五 富田子鵬(医) 一〇	宇治惟典(阿蘇大宮司) 一〇 僧紹完(妙解寺僧) 六 僧若冲(蓮光寺僧) 一一 古屋重次郎(本藩人 在江戸) 一二 大田子龍(本藩人在若狭) 六	ここでは、神官および寺僧の詩をはじめとして本藩人の他国在住者の詩を収める。
卷之十	一二一			

麗沢詩集

編者

岡崎廬門については、「続諸家人物志」に小伝があるが、最近の宗政五十緒氏の記述がもっとも詳しいので左に紹介する。

江戸時代の漢詩人。諱は信好、字は師古、平太郎と称する。京都に生まれる。父は岡崎信房。天明七年(一七八七)三月二日没、五十四歳へ墓誌。京都鳥辺山延年寺墓地に墓がある。「事蹟」幼にして父を喪う。長じて学を嗜み、伏見の竜草廬に師事し、群書に博く渉る。かたわら文辞を善くし、数十点の編著書がある。多病で一生、出でて仕えなかった。草廬門で安永、天明期の京都の詩文家と交友があり、「廬門詩集」六卷の刊本がある。(中略)(生没)